

本, フィルター 54 本および無機液体 4 本の計 1.055 本が日本アイソトープ協会へ引き渡されており, 全体の 25% に相当する. また, 廃棄物容器の貸与を受けている施設は 145 か所と核医学施設の 8 割に相当するが, 集荷を行なった施設は 40% であった.

3. 消化性潰瘍術前, 術後の gastroscintigram (胃排出機能検査) の意義

谷口 勝俊 田伏 洋治 山本 達夫
山本 誠己 近藤 孝 岡村 貞夫
河野 暢之 勝見 正治 (和医大・消外)

胃排出機能検査として優れている gastroscintigram (GSG) を消化性潰瘍症例に施行し, その胃排出について検討した.

対象: 正常人 22 例, 消化性潰瘍 109 例, 消化性潰瘍術後 119 例の総計 250 症例であった.

方法: ^{99m}Tc sulfur colloid (1.2 mCi) を混入した粥食を被検者が摂取後, 座位にて腹部よりシンチスキャンした. 胃内容が半分になる時間を $T_{1/2}$ とした.

成績: 正常例の $T_{1/2}$ ($M \pm SE$) は 57 ± 3 分に対し, 胃潰瘍が 66 ± 4 分, 十二指腸潰瘍が 29 ± 2 分であった. 胃排出パターンは正常例, 胃潰瘍, 胃・十二指腸共存潰瘍例が linear pattern を示し, 十二指腸潰瘍のみが E-pattern を示した. 潰瘍の発生部位, 時相と胃排出とは関連が見られた. 術後症例では胃潰瘍には幽門括約筋保存胃切除術が, 十二指腸潰瘍には選択的近位迷走神経切断術の胃排出が生理的であった.

まとめ: (1) GSG は胃内容排出機能検査として, 簡単, 安全かつ正確であった. (2) 消化性潰瘍の発生部位, 時相と胃排出は関連が深い. (3) GSG は消化性潰瘍の手術成績の判定, 術後評価等に役立ち, その意義が大きい.

4. 脾シンチグラフィーと内視鏡的逆行性膵実質造影法 (ERPP) との対比

大西 隆二 西山 章次 松尾 導昌
中居 幸子 牛尾 啓二 杉村 和朗
(神大・放)
吉本信次郎 大槻 修平 (県立西宮・放)

脾シンチグラフィーと内視鏡的逆行性膵実質造影法

endoscopic retrograde pancreatic parenchymography (ERPP) は, とともに膵実質を直接描出しうる検査法であるが, その描出機序は異なっている. すなわち, 脾シンチグラフィーはメチオニン代謝を利用したものであり, ERPP は造影剤が膵管より膵実質に漏出することにより造影されるものである.

今回, われわれは, 脾疾患が疑われた 15 例に, 両検査を併用し, 両検査法の診断的意義について対比検討を行なったところ, 脾シンチグラフィーの結果と ERPP の結果とは, 15 例中 11 例 (73%) において一致した.

また, 描出機序の違うこれらの両検査法の併用は, 慢性脾炎や脾がんの診断に有用と思われた.

5. ^{99m}Tc -HIDA による肝・胆道機能検査

土野 俊一 長谷川義尚 梶田 明義
橋詰 輝己 井深啓次郎 (大阪成人・RI 診療)

^{99m}Tc を標識した肝胆道系診断用の放射性医薬品が開発され, 臨床的意義に関する多くの報告があるが, その動態の定量的解析の意義については未だ十分に検討されているとはいえない. われわれは慢性肝炎 2 例, 肝硬変 1 例, 胆のう疾患 7 例, 肝のう腫 2 例, 脾癌 2 例, Dubin Johnson 症候群 1 例, 右胸心 1 例, 肝胆に著変をみとめないもの 2 例, 計 18 例について ^{99m}Tc -HIDA (科研化学) 3 mCi 静注後日立ガンマビューカメラからの情報を, 日立 EDR 4200 核医学データ処理装置を用いて 90—120 分間収録した後, 肝, 胆のうに関心領域を設定し, time activity curve を作製, 解析した.

肝からの消失速度 ($T_{1/2}$) は肝, 胆に著変をみとめない 2 例で 27, 35 分, 胆石でも 14 分と短い例があったが, 慢性肝炎, Dubin Johnson 症候群, 総胆管結石および脾癌の各 1 例で 71—168 分と延長していた. 胆のうの造影された 14 例でその最高放射活性の 50% の値にまで上昇するに要した時間は 19—40 分の間に分布し, 肝胆に著変をみとめない 2 例では, それぞれ 38, 39 分であった. 次にセオスニンを注射したのは 11 例で, 胆のうの放射活性が注射前値の 50% になるまでの時間は 11 例中 7 例は 13—30 分であったが, 肝硬変及び Dubin Johnson の各 1 例および胆石の 2 例では注射 30 分後にも半減に至らなかった.

本法は胆のう機能障害の診断に有意と考えられ, 今後症例を重ねて検討したい.